

外国語教育学会 (JAFLE) 第23回研究報告大会

会場 東京外国語大学 発表会場 大会議室

1日目 2019年12月14日(土)、2日目 2019年12月15日(日)

1日目 12月14日	発表者	所属	タイトル	レジュメ
09:30-10:00	ファム ティ タイ ン タオ	東京外国語大学博士 後期課程	複合動詞「～込む」の習得—ベトナム国立ダナン外国語大学 における調査を基に—	複合動詞の意味用法は多岐にわたるため、習得が困難である。そのため、ベトナム語母語話者のみならず中国や韓国などの日本語学習者においても複合動詞、特にアスペクト複合動詞の生産性が非常に低いということである。産出性の低さは必ずしも複合動詞の意味が理解されていないことを示すとは限らず、会話や作文では産出頻度が低いものの、その意味は理解されている。本研究は、ベトナム語母語日本語学習者が複合動詞をどの程度理解しているのかを調査すべく、「複合動詞文の受容度テスト」を作成し、日本語母語話者の受容度と比較しつつ考察するものである。理解実態を把握した上で、より効果的な教授法を提案する。
10:05-10:35	八木真生、川村 よし子	東京外国語大学、東 京国際大学	非漢字圏中上級日本語学習者は文章中の重要語を辞書で 調べるか—辞書引き行動の観察及びインタビューの結果から —	中上級になると、未知語が含まれた文章を辞書を使って読む機会が増える。その際、文章理解に重要か否かで辞書の使用・不使用を判断し、効率的に読解を行うことが求められる。ところが、筆者らの先行研究では、重要語であっても辞書を引かず、大意の把握にとどまる学習者が多かった。読解の目的が不明瞭であることが原因の一つであることがわかった。そこで、本研究では、「レポートを書くための情報収集」という目的を設定し、文章中の重要語を辞書で調べるか否かを調査した。読解中の辞書引き行動を観察し、読解後にインタビューを行った。その結果、重要語でも辞書で調べないケースが散見された。本発表では、原因を分析し、読解指導への提案を行う。
10:40-11:10	布村猛、海野多 枝	東京外国語大学大学 院博士後期課程、東 京外国語大学	日本語学習者の音声における単語アクセント実現のアプローチ: 高さ、長さ、強さの観点から	日本語アクセント指導の現場では、高低アクセントを語の弁別等に用いない言語を母語とする学習者が、音の高低の制御方法が分からずに苦勞する様子が観察される。本研究では、学習者は強さや長さを意識しながら(あるいは無意識にコントロールしながら)高さを制御していると仮定した上で、母語話者の発話音声モデルに、モデル音声を繰り返し発音した学習者の音声資料を分析し、日本語母語話者との比較を通じて、学習者の高低アクセント実現における高さ・長さ・強さの3要素の関わり、及び、学習者の母語別の傾向について考察する。

11:15-11:45	平松尚子、鈴木綾乃、速水淑子	横浜市立大学	日本人学生と留学生が多言語で共に学ぶプロジェクトの試行と課題	本発表では、横浜市立大学で 2019 年度前期に行った多文化間共修の取り組みについて報告する。本学では 4 月から 6 月に「多言語で共に学ぶワークショップ」をパイロットプロジェクトとして実施した。外国語科目（中国語、韓国・朝鮮語、ドイツ語、フランス語）を学ぶ日本人学生と、その言語の母語話者であり本学で日本語を学ぶ留学生が言語別にグループを作り、統一テーマのもとに事前調査およびフィールドワークを行い、グループの言語および日本語でプレゼンテーションをするというものである。本発表では、各グループが調査や発表をどのように進めていったのかを報告し、今後の実践に向けての課題を述べる。
11:50-12:20	麻生廸子、菊池富美子、森田淳子、大神智春、鈴木綾乃	四天王寺大学、明治大学、東京工業大学、九州大学、横浜市立大学	日本語学習者横断コーパス(I-JAS)に見られる多義語コロケーションの分析ー「きく」「でる」「つける」に焦点を当ててー	近年、日本語教育においてコロケーション(連語)習得研究が重要視されるようになってきている。しかし先行研究では、ある中心語で形成される様々なコロケーションについて、どのような表現の習得が進みどのような表現の習得が遅れているかその実態を調査したものは殆どない。そこで本研究では、多義義を中心語とするコロケーションを対象とし、中国語を母語とする学習者が「きく」「でる」「つける」のどのような語義で形成されるコロケーションを習得し産出することができるか、その実態を明らかにすることを目的とする。今回は国立国語研究所が開発した日本語学習者横断コーパス(I-JAS)を用いた分析を試みる。
12:20-13:20	休憩			
13:20-13:50	彭悦	京都大学	中国語母語話者の日本語映像作品視聴時の語彙戦略の利用	本研究では、中国語母語話者の中上級日本語学習者が日本語の映像作品を視聴する際、どのような戦略を利用して語彙を学習しているかを明らかにするために、普段、映像作品を視聴する場合と、語彙学習に対する意識が高められた状態で映像作品を視聴する場合との 2 つに分けて、語彙学習戦略の使用状況を考察した。協力者 30 名を対象とした質問紙調査とインタビュー調査を分析した結果、普段の視聴では、メタ認知的な戦略がよく使われ、語彙の記憶の強化に関する戦略の使用が少ないという特徴があった。語彙学習を意識して視聴した場合には、普段の使用傾向と比較すると、使用した戦略の種類が限られていた。

13:55-14:25	CIOLCA RALUCA MARIA	大阪大学大学院言語 文化研究科博士前期 課程	トキ節におけるル形・タ形の使用状況と指導方法—ルーマニア人日本語学習者を対象に—	本発表では、ルーマニア人日本語学習者のトキ節におけるル形・タ形の使用状況を明らかにし、ルーマニア語と日本語の相違点を中心とした指導方法を提案する。アンケート調査より、ルーマニア人学習者が犯す誤用は、主節とトキ節における述語のテンスを一致させる傾向から生じることを明確にする。原因は、相対的テンスが選択されない母語の転移、または学習者がル形・タ形の選択に対して感じる不安感である。そこで、庵(2011、2015)の「有標・無標」の考え方を元に、日本語で主節とトキ節の述語の形が一致していない場合を「有標」として設定し、そのような場合に関して意味・構文の観点から説明する指導方法を提案する。
14:30-15:00	董炎林、野北明 嗣	武蔵野大学修士課 程、会津大学	日本人と中国人日本語学習者の拍の等時性の感覚とその発音の実現	本研究では、メトロノームに合わせて、日本人と中国人日本語学習者に無意味語(例「シンチーリオウ」)を、1拍ごとに区切って発音させ(例「シ・ン・チ・ー・リ・オ・ウ」)、中国人が拍を正しく数えられるかを調査した。結果、日本人は特殊拍(ン、一、ッ)も音節主音のように発音した。一方中国人は拍の数が間違っている単語が少なくない(例「ハ・イ・ナ?ン・ダ・オ」)。特に長音が絡むと拍数は正しくても発音が乱れる場合が多かった。ただし「シンチイスウ」のように長音も母音字で表した単語は混乱がほとんど無かった。日本人の発音を参考にすると、長音は同じ母音の連続(例「チー」=「チイ」)、「ン」も音節主音の鼻音と指導することを提案する。
15:05-15:35	石崎達也	東北大学大学院博士 課程	F0、F1 による母音の緊張性の可視化と発音方法の検討の試み	母音の緊張性を可視化することによって、産出される母音の緊張・弛緩状態を制御できる可能性があることを提示する。母音の緊張性に関する定量的な定義は管見の限りなされていないが、第 1 フォルマント周波数 F1 の時間経過に伴う変動量である第 1 フォルマント移動の角度 θ を緊張性の指標とみなすことができる。日本語話者の母音「イー」「イイ」を検討して、第 1 フォルマント移動や基本周波数 F0 の変動量、持続時間を用いれば緊張性を数値化できるとの可能性を認めた。このような場合、緊張性の指標である角度 θ を二極化させるような発音方法を検討できることになり、緊張性を考慮した母音の発音指導の実現に寄与し得る。
15:40-16:10	劉国彬	福山大学	日本とインドネシアの中国語教育の比較に関する研究	本発表の目的は、日本の福山大学孔子学院とインドネシアの UNNERSITAS AL AZHAR INDONESIA 孔子学院の中国語教育を事例に、日本とインドネシアの中国語教育のそれぞれの特徴と、日本とインドネシアにおける中国語教育の社会的機能を明らかにすることである。研究方法は、資料分析と孔子学院の先生に対するインタビューを中心に、二つの孔子学院の設立背景、経緯、経営モデル、当該国との関係、HSK 試験の特徴から分析を行う。

16:15-16:45	杉江聡子	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院特任助教	中国語ガイド育成のためのモバイルラーニングシステムを用いたアクティブ・ラーニングの設計、実践と評価	観光政策主導のインバウンド推進により中華圏からの訪日観光客との交流が益々増えており、観光人材の育成が急務である。しかし、中国語教育のアプローチで観光教育を行い、産業をフィールドとし、地域と連携するオープンラボ型のアクティブ・ラーニングが不足している。本研究では、北海道のローカルな観光教育のニーズに注目し、中国語ガイド育成のアクティブラーニングの授業設計に基づき、教育実践を行った成果を報告する。特に、外国語運用技能のみならず、社会人基礎力(経産省、2013)の能力と要素につながる学習者視点の成果の認識の質的分析に焦点を当てる。
16:50-17:20	小川典子	立命館大学言語教育センター	中国語学習者の読解活動における未知語の処理戦略	本研究では、中国語学習者が読解活動の過程で未知語と遭遇した際に使用する戦略を調査している。調査では中国語専攻の2年生5名、3年生5名、計10名の学習者を抽出し、思考発話法(think aloud)を用いて読解活動を実施した。思考発話法は調査協力者が読解や作文などのタスクと同時に頭の中で考えていることを発話するという調査法で、本調査では学習者に読解過程や頭の中で考えていることを発話しながらテキストを読んでもらった。調査の結果、学習者が(1)モニタリング(2)自問自答(3)字を書く(4)L2発話(5)繰り返し(6)内容再構築(7)検証(8)無視(保留)という8種類の戦略を使用している様子が確認された。
17:25-17:55	総会			
2日目 12月15日	発表者	所属	タイトル	レジュメ
09:30-10:00	張正	東京外国語大学	中国語の数量詞表現<一+類別詞>の第二言語習得:一学習者コーパスに基づく日本語母語学習者と英語母語学習者の比較一	本発表は、中国語で「完結」「実現」した事象に義務的に名詞に前置される数量詞表現、<一+類別詞>の習得と母語の類型の影響について、学習者コーパスの分析をもとに論じる。東京外国語大学中国語専攻の日本語母語話者は、欠落現象が顕著であるのに対し、台湾師範大学から提供された英語母語話者による中国語学習者コーパスでは、過剰使用が顕著である。学習者コーパスにおける欠落・過剰使用現象を精査することにより、<一+類別詞>の用法について、名詞に義務的に付加される「完結」「実現」用法、付加できない「否定」「仮定」の用法の教授法を提示する。

10:05-10:35	スニサー ウィッタ ヤーパンヤーノ ン(齋藤)、富盛 伸夫	東京外国語大学	タイ語教育における社会文化的適切性と CEFR への適用-ポ ライトネス理論の視点から見た人称詞・呼称表現を中心に-	日本におけるアジア諸語の教育では、文字・音声・文法・語彙などを短期間に学ぶという高いハードルが ある一方で、言語形式的には複雑ではない表現が、対話者・場面・社会的関係・発話意図などが関与す る社会文化的方略の面からは、適切な言語運用には難易度が高いことが多い。本発表は、CEFR2018 年版で新たに提示された Sociolinguistic Appropriateness の趣旨を踏まえ、タイ語教育で問題となる「人 称詞と呼称表現」を研究事例として、ポライトネス理論を批判的に援用することにより学習者の理解を促 し、タイ語の社会文化的コミュニケーション能力測定のレベル設定とカリキュラムへの組み込みを提案す る。
10:40-11:10	山田裕也、西村 凌太	東京学芸大学大学 院、東京学芸大学教 職大学院	新大学入試におけるリーディングセクションの難易度比較： GTEC および英検に焦点を当てて	2020 年度から、大学入学共通テストおよび民間試験を活用した大学入試制度が実施される（文部科学 省、2017）。複数の試験を同一の大学入試制度の中で活用するに伴い、CEFR との対照表を文部科学省 (2018) が公表したが、南風原 (2018)は得点の出やすさや合格ラインの到達のしやすさは試験間で異な る可能性を指摘している。また、佐藤・山田 (2019a)、佐藤・山田 (2019b)のように各試験間の文章およ び設問の特徴を比較分析した研究はあるが、これらを基にした実証研究は十分に行われているとはい えない。そこで本研究では、高校生と大学生に GTEC (Advanced) および英検 2 級のリーディングセクショ ンの問題を解答してもらい、文章要因・質問タイプ要因・選択肢要因等の観点から分析を行い、それぞ れの試験が受験者に求めているリーディング能力の違いを明らかにし、難易度に関して比較・考察を行う ことを目的とした。

11:15-11:45	佐藤 選	東京学芸大学	新大学入試と学習指導要領の対応関係―リスニングセクションに焦点をあてて―	2020 年度より開始する新大学入試制度において、センター試験に変わり共通テストおよび民間試験の活用が予定されている。ライティングとスピーキングの導入という点に注目が集まる一方、リーディングやリスニングセクションが従来とどのように変化するかという点では、ほとんど調査されてきていない。本調査では、リスニングセクションに焦点をあて、出題内容が学習指導要領の記述とどの程度一致しているかを試験ごとに分析を行った。その結果、従来のセンター試験や学習指導要領と大きく異なる試験が見られた。本結果を通し、新大学入試において受験者が求められている能力や、学校現場において求められる指導が変化する可能性について考察する。
11:50-12:20	春日 淳	神田外語大学	日本人学習者を対象としたベトナム語文法教育の再検討	日本人学習者にベトナム語の文法を教える際、これまでは、もっぱら伝統的な語法(各語の意味と用法)と教育文法的に捉えた構文(一種の定型表現)を中心とした文法解説が行われてきた。本発表では、日本語とベトナム語のもつ言語的特徴の類似点・相違点を整理したうえで、両言語が同一の文意を表すのにどのような言語的表出を行うかという問題について、言語的表出の結果である構文(自動／他動、能動／受動、使役、その他の構文)の差異から日本語とベトナム語の文法的な差異について分析する。その結果から、日本人学習者がベトナム語文法をより深く理解し、実際の言語使用にも応用が利く知識とするための文法教育の在り方を検討する。
12:20-13:20	休憩			
13:20-13:50	近藤野里	名古屋外国語大学	フランス語教科書におけるリエゾンとフランス語学習者のリエゾン	フランス語学習者にとって発音の上で困難を伴うものの一つがリエゾンである。リエゾンは、語が単独で発音された場合に発音されない子音字が、母音で始まる語が後続する場合に発音されるという現象である。しかし、この条件がそろったとしても、リエゾンには3つの異なるコンテキスト(義務的、選択的、禁止的)があるため、これらのコンテキストを学習者が学習する必要がある。本発表では、特に選択的リエゾンについて、フランス語教科書のリエゾンを分析することで、教科書規範の中でリエゾンがどのようなコンテキストで実現されやすいのか、また学習者はそのようなリエゾンをどのような頻度で実現するのかについて分析を行う。本研究では特に、長文テキストを読み上げと自然会話でのリエゾンの実現の違いに注目したい。

13:55-14:25	杉山香織	西南学院大学	留学経験による未知語の変化 ? テキストにおける未知語の予測とその検証	本研究は、日本語を母語とするフランス語初級学習者(留学未経験者)と中級学習者(留学経験者)を対象とし、テキストにおける未知語を予測・検証し、留学経験による未知語の変化を明らかにするものである。まず、留学未経験者と留学経験者に対してそれぞれ同様の手法を用いてデータを収集し、語彙の習得傾向を精査する。その後、その傾向をもとに、特に留学未経験者については中・低頻度語、フランス語圏での生活に関わる単語、直説法現在形の一人称と二人称以外の活用形を中心に、留学経験者については synforms や deceptive transparent words を中心に、別のテキストを使って未知語を予測し、その正確性を検証する。
14:30-15:00	増田朋子	神奈川大学	V.A.ポストフスキーのコンプリヘンション・アプローチー日米における受容及び影響ー	1970年代に米国国防総省外国語学校のロシア語教師 V.A.ポストフスキーによって提唱されたコンプリヘンション・アプローチは聴解系メソッドの一つに分類され、後のクラッシェンらによるナチュラル・アプローチにも少なからぬ影響を与えたと見られる教授法である。発表後、日本でも一部の英語教育者の注目を浴びたようであるが、本アプローチが特殊な外国語学習環境での実験に基づくものであったことから、一般的な教室での適用の可否等の疑問が解決されぬまま、普及することなく何時しか忘却されていったという経緯がある。その経緯や原因について、米国での調査に基づき明らかになった事項を発表したいと考えている。
15:05-15:35	染谷藤重	上越教育大学	高校生の心理的欲求充足が内発的動機づけを予測するプロセス-階層的重回帰分析を用いて-	本発表では、自己決定理論の中で数多くの研究がなされてきた心理的欲求の充足と内発的動機づけの関連性に関して再検討を行い、その結果から教育的にどのような示唆が得られるかを検討する。多くの研究では、心理的3欲求が同時に充足されることによって、内発的動機づけが高まることを言及している(e.g. Reeve、2018)。しかし、実際のところ、自律性・有能性・関係性の欲求充足が、同程度に内発的動機づけに寄与しているというわけではない(染谷、2019)。そこで、本研究では、階層的重回帰分析及び SEMを用いて、高校生の心理的3欲求が、内発的動機づけを予測するプロセスを検証する。

15:40-16:10	結城健太郎・白澤秀剛	東海大学	外国語学習における学習成果フィードバックがもたらす学修行動の変化-主体的学修分類の観点から	発表者らは学生の主体的学修行動を、成長や獲得を目的とした学修方略の使用頻度と不利益回避を目的とした学修方略の使用頻度の 2 要因により分類し、学習者の授業への取り組み状況・学習成果と比較しつつ、検証を行っている。本発表は、主体的学修分類毎に語学授業の履修態度や学修行動にどのような違いが現れるかの調査に加え、学期末の学習成果のフィードバックが次学期の学修行動に与える影響が主体的学修分類毎にどのような違いが見られるかについて調査する。これら調査は、レベル・目的等の異なる複数のクラスで調査・分析を行い、言語学習における主体的学修が与える影響について考察する。
16:15-16:45	本間直人、山崎吉朗	日本大学非常勤講師、一般財団法人日本私学教育研究所研究員	中等教育における英語以外の外国語教育―教員免許状更新講習を中心に―	オリンピック開催を翌年に控えて、中等教育の英語以外の外国語教育は推進と後退が繰り返えされている。本発表では、最新の英語以外の外国語教育の現状と文科省の政策(教育振興基本計画、外国語教育推進事業)について報告すると共に、今後の展開について考察する。また、平成 21 年度から継続している多言語教員免許状更新講習について、今年度(令和元年度)実施された全国の多言語教員免許状更新講習を概観するとともに、過去 10 年間に実施された講習を振り返り、今後の展望について述べる。言語に関する講習と異文化に関する講習の分析によって、現在、そして、これからの中等教育における外国語教員に求められる資質・能力についても論究する。